学園長だより 第36回

伝統

愛知淑徳学園理事長・学園長
小林素文

全日本中等学校対抗競技大会優勝（昭和5年）　後列左端 創立者 小林清作先生

二〇二二年一〇月一五日、名古屋ガーデンパレスで「愛知淑徳学園水泳部創部百周年記念祝賀会」が開催されました。当日は雲一つない淑徳晴れ、水泳部の光輝ある伝統を祝福しているようでした。

＊

水泳部は大正十一年知多郡の鬼崎海岸で学校行事として初めて開かれた水泳学校をきっかけとして誕生しました。

当初は海岸や池での練習。ようやく学校に出来たプールも地下水を利用していたため今では考えられない状態でした。

当時のOGの手記『私達は底の見えるプールで泳いだ事はありません。それほどプールは青黒くにごっていたのです…目の前にイボ蛙と鉢合わせということだって日常茶飯事で、そんな時、「キャア」なんて声は出せません。出したら大変。「神聖なプールで奇声を発するとは何事です」という事で、足のだるくなる程立たされて…簡単に「キャア」ではすまされなかったのです』（学園六十周年記念誌より）

環境にめげずに猛練習を重ねた生徒たちの頑張りが実り、全国優勝を重ねる強豪校となり、戦前の愛知淑徳スポーツ黄金時代の一翼を担っていきました。

＊

戦後の水泳部の復活をいち早く支えられたのが原田静子先生です。

原田先生は淑徳出身で在学中は水泳部で活躍。昭和女子専門学校で薬学を学んだ後東京帝国大学で研究助手を務められた経歴から、愛知淑徳の理科教員に迎えられ、理科教員をしつつ水泳部の顧問兼監督となられました。

先生の卓越した指導により、水泳部は全国に鳴り響く強豪校となり、四人ものオリンピック選手を輩出していきます。

これほどの実績を残された先生の人柄の一端が祝賀会当日配布された『創部百周年記念誌』に記されています。

障害を持つ次男がいるOGの手記『「これまで頑張ってくれたマネージャーたちにお礼がしたい。あなたの事情は知っています。それでも、是非きてほしい」その言葉に背中を押され、私は懐かしいプールへ会いにいきました。そこで、記念の盾とともに先生から「あなたらしい子育てをしなさい。頑張りなさい」と温かい励ましをうけました』

もう一人のマネージャーOGの手記『五〇mプールとのお別れ会の際、先生より「縁の下の力持ちだったマネージャーさんに」と大切な大切な思い出の詰まったトロフィーを譲り受けました。…それからわずか一年も経たず原田先生は逝かれてしまいました。…出棺の際、誰からともなく校歌の斉唱が始まり、卒業生の心が一つになりました。』

＊

本学園の姿勢は「伝統は立ちどまらない」であり、これからも時代の動向に敏感な進取の気性にあふれた学園でありたいと思う一方で、どのような時代になろうとも「生徒たちが光輝こうとひたむきに努力している、そんな生徒たちを教職員が厳しくも心温かく育てようとしている」そんな月日の積み重ねが、伝統となり息づいている学園であり続けたいと、祝賀会で心より願っていました。